

機関番号：14503

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530820

研究課題名（和文） 読解力を育む中等歴史カリキュラムの開発と評価モデル構築に関する研究

研究課題名（英文） Building of secondary history curriculum and evaluation model that develop historical literacy

研究代表者

原田 智仁（HARADA TOMOHITO）

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：90228651

研究成果の概要（和文）：研究の結果、伝統的歴史学習を次のように転換すれば読解力を育成する歴史学習が可能になることが判明した。第1に授業を教師と生徒の問答法から教師の発問を通じた生徒同士の議論へ転換する、第2に主要教材を教科書の内容理解から史資料の解釈へ転換する、第3に学習活動をプリントの空欄補充から自らの解釈結果の論述へ転換する、第4に評価法を定期考査での診断テストから単元毎の診断テストとワークシートの評価へ転換する。

研究成果の概要（英文）： If the traditional history study will be converted as follows, the history study promoting the reading literacy of student will become possible.

First, the class is converted from teacher and student's questions and answers methods to the student's discussion concerning shared task. Secondly, the main teaching material is converted from the content of the textbook to the primary sources. Thirdly, the learning activity is converted from memorizing the correct answers to the statement of student's own interpretations. Fourthly, the evaluation method is converted from the test of memorized knowledge to the assessment of student's performance .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	900,000	270,000	1170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：中等歴史カリキュラム, 読解力, 史料学習

1. 研究開始当初の背景

(1) 中等歴史教育の目的の一つに歴史的思考力の育成がある。それは学習指導要領の日本史A・Bや世界史A・Bの目標に明示されている通りである。しかし日本の多くの中学校

や高等学校で行われている歴史授業や評価の現状を見る限り、歴史的思考力の育成がほとんど有名無実化していることもまた確かであると言わねばならない。その理由として、第一に歴史的思考力の概念が多義的であり、

論者や教師によってとらえ方が異なること、第二に歴史的思考力の育成・評価の理論と方法が確立されていないことが挙げられる。

(2) 従来の歴史的思考力の研究は、①哲学的研究、②心理学的研究、③外国事例の研究に大別されるが、今後は④教科教育学研究としての思考力の研究が課題になっている。これに迫るために「読解力」の概念に着目した。

(3) 本研究で「読解力」に着目したのは次の三つの理由からである。

①近年の PISA 調査の結果、日本の児童・生徒の読解力が劣っている状況が指摘され、国語以外の教科においてもその育成が課題になっていること。

②指導要録において評価の観点として位置づけられている 4 観点の妥当性について先の中教審で議論になったように、より現実的な評価方法についての研究が要請されていること。

③4 観点の内、「思考・判断・表現」と「資料活用の技能」は密接に関連しており、これを「読解力」ととらえれば相互に関連づけて育成と評価の手立てを考察できること。

2. 研究の目的

(1) 本研究では歴史的思考力の概念を「歴史の読解力」ととらえることで、より実践的で具体的な歴史的思考力の育成と評価の理論を確立することをめざした。

(2) 本研究に先立つ諸研究により以下のことが明らかになっていた。①歴史において思考力だけを問うのは難しく、史資料等の読解が不可欠なこと、②思考力を診断的に評価するだけでは、生徒の一定の学力評価はできても授業の評価にはならないため、育成の論理と一体化した評価が必要なことである。

(3) 本研究では上記の成果を踏まえ、視野を米英にも広げて歴史の読解に関する学習論、授業構成論、評価論に関する先行研究を分析するとともに、現地での中等学校での歴史授業をも観察・検討して、歴史の読解力の育成と評価を一体的に考察する。

3. 研究の方法

(1) 歴史的思考力や読解力に関する先行研究の内、特に米・英における歴史のスキルやリテラシー、コンピテンシーに関する研究を分析・検討し、歴史読解力の概念を明らかにする。

(2) 歴史の読解力育成の論理について、内外の研究者の考え方や歴史授業実践を批判的に考察することを通して、現状と課題を明らか

かにする。

①米英の中等歴史教科書における歴史スキルやリテラシー育成の論理を分析する。

②米英の中等歴史授業を観察するとともに教師へのインタビューを行い、歴史の思考や読解力育成に関する手立てを調査する。

③米英の大学の社会科教育関連の研究者にインタビューを行い、歴史的思考・読解に関する学会の研究状況を明らかにする。

(3) 歴史の読解力育成と評価方法について、具体的な中等歴史授業構成のレベルでモデル化を図る。

①上記(1)(2)の研究を踏まえ、仮説的に歴史の読解力育成の論理をモデル化する。

②仮説化したモデルに基づく中等歴史授業計画を作成し、学会(研究大会・学会誌)等の場で公表し、諸氏の批判を仰ぐ。

③学会等での公表・批判を受けて、モデルの修正を図る。修正した新モデルについては他の研究成果とともに、可能な範囲で社会に公表する。

4. 研究成果

(1) 歴史の読解力の概念

歴史の読解力に関する内外の先行研究や歴史教科書等を分析した結果、米国ホルト社(Holt Rinehart & Winston)の中等歴史教科書における reading literacy に着目することにした。そして歴史の読解力を、①歴史の語彙(academic vocabulary)や知識(事実的知識、概念的知識)と、②探究技能(社会科の技能、歴史学の技能)により構成されるものと定義した。

(2) 歴史の読解力育成の論理

上記のホルト歴史教科書の理論的指導者の一人、スタンフォード大学のワインバーグ(S. Wineburg)教授は歴史家のように読解する方法(Reading like a historian)を提案した。それは、単なる読解の方略のみを指すのではなく史料分析の際の思考や懐疑全体を指している。生徒は読解に際して、個々の事実や内容に関心を持ち、文章についても客観的とみなしがちであるが、歴史家は絶えず著者の仮説、解釈、偏見、パースペクティブについて考えをめぐらせ、証拠に基づいて文章の妥当性を判断しようとする。こうした歴史家の方法は、活発な探究によってこそ身に付くのであり、自然に任せていては身に付かないという。

ワインバーグは歴史家のように読解する認知訓練の方法を次のごとくモデル化した。*(Reading Like a Historian: World History Toolkit, Holt, Rinehart & Winston.)*

<第1段階>教師が模範を示す。

①方略1: 文書の出所を明らかにする。

- ②方略 2：問いを書き出し答えを見つける。
 - ③方略 3：パースペクティブを理解する。
 - ④方略 4：著者に対する質問を書き出す。
- <第 2 段階> 教師指導下での生徒の実践
- ⑤方略 5：教科書の該当頁を予め概観する。
 - ⑥方略 6：2 人 1 組で考えを分け合う。
 - ⑦方略 7：グラフィック・オーガナイザーを活用する。

<第 3 段階> 生徒単独での実践

- ⑧方略 8：再度 2 人 1 組で考えを分け合う。
 - ⑨方略 9：歴史の記述（物語）を作成する。
- ワインバーグのこのモデルには、スキヤフォールディング(scaffolding)の考え方が反映している。スキヤフォールディングとは、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域論」をヒントに J.S.ブルーナーらにより提起された概念で、直訳すれば「(建築用の)足場」となる。だが、スキヤフォールディングは単なる支援 support とは異なり、より高次の概念や技能の獲得に挑戦するための方略であり、やがては教師の支援なくとも自立できるようにするのが最終的なねらいである。

(3) 読解力を育む中等歴史カリキュラムの要件—米英の歴史授業から学ぶもの—

①マカレヴィ(T.McAleavy)の歴史学習論

英国の歴史教科書執筆者でありナショナル・カリキュラムにも影響を与えたマカレヴィは、歴史を解釈ととらえ、解釈の根拠となる史料の分析を歴史学習の基本原則とする。史料の分析には史料に問いかけるための語彙(analytical vocabulary)が必要であり、また史料批判を必然的文脈で行うためにも、歴史学習を探究の過程として組織すべきだと主張する。

②バナム(D.Banham)の歴史学習論

英国の高校歴史教師バナムは、歴史学習において書くこと writing を重視する。歴史の解釈は単なる過去の理解のためにあるのではなく、市民的能力としての思考力と表現力を鍛えるためにある。歴史学習では史料について解釈し、自分の考えを分析的、推論的に書くことが重要であり、そうした史料理解と議論のスキルを結びつける方略としてエビデンス・ハンバーガーを推奨する。それは、目的の表明と結論の間に、自己の議論を証拠づけ、あるいは反対意見を論駁する証拠を位置づける方略であり、それを書くことを通して養おうとするものである。

③英米の歴史授業の観察から学ぶもの

2008 年度に英国(イングランド)を訪問した。ロンドン、ケンブリッジ、ベリーセントエドモンズ、ノーリッジの中等学校の授業を観察し、教師と懇談した。中でも、ロンドンの Raines' Foundation School のウィルキンソン(D. Wilkinson)先生の歴授業では、18 世紀半ばのロンドンを描いたホガースの 2 つ

の版画「ジン横町」と「ビール通り」を取り上げ、先生の発問を手がかりに版画の読解を進めていった。スクリーンに示された本時の学習課題は、「なぜホガースの絵は当時の民衆に人気を博したのか」とあり、二つの絵の比較を通して、当時のロンドン民衆の階層性と心性(モラルティ)に気付かせることにポイントを置く実践であった。先述のマカレヴィの学習論と同じく、史料(版画)の読解のために分析的語彙として歴史の事実や用語を押さえさせるが、あくまでねらいは史料の読解にあることが窺えた。

続いて 2009 年度には米国を訪問し、ヴァージニア州、メリーランド州、ワシントン州の中等学校の歴史授業を観察するとともに、教師にインタビューを行った。どの学校にも共通するのは、教科書や史料の読解の仕方、ノートのとり方については、一定の規則性に基ついて徹底して周知させようとしていることであった。とくに、ベルビュー市のチヌーク・ミドルスクールでは、ベテランのクレマー先生と若手のジョナス先生が共同で教材を開発し授業研究を進めていた。二人に歴史の読解力・思考力を付けるための秘訣を尋ねたところ、<読むこと、書くこと、ハンズオン(作業的体験的活動)>であるとの示唆的な回答を得た。

(4) T.ケンライ氏との共同研究の成果

2010 年度に兵庫教育大学の外国人研究員短期招聘制度により来日した米国タウソン大学の T.ケンライ(Todd Kenreich)准教授と、読解力を育成する社会科教育の方法について共同研究を行った。ケンライ氏は地理教育の立場から、筆者は歴史教育の立場からそれぞれアプローチし議論したが、特にケンライ氏の次の指摘からは示唆を受けた。

社会科における読解の困難を引き起こす要因は、①使い慣れない語彙、②抽象的概念、③動機付けの欠如、④背景となる知識の欠如、⑤読解方略の欠如であり、読解力を育成するためには対象(主題)に即してこれらの欠如を補い、熟達させる必要がある。その際、対象が物語的テキストの場合はテーマ、プロット、葛藤、解決、登場人物、舞台設定等の要素に着目して読解し、説明的テキストの場合は定義、順序づけ、分類、比較・対照、列挙、問題・解決、原因・結果等のスキルを活用して説明することの重要性が指摘された。

(5) 三原慎吾氏との共同研究の成果

三原慎吾氏は兵庫県立明石北高等学校教諭であり、文部科学省の「学力の把握に関する研究指定校事業」(2008~2010 年度)を引き受け、「資料活用能力を育成する日本史 B の展開」の研究に取り組んだ。筆者はその指導を依頼されたのを契機に、共同で歴史の読

解力育成と評価の研究を進めることにした。三原氏は精力的に史料の読解を中心にした授業を開発し、筆者は理論的な助言を行った。その結果、次の示唆が得られた。

①読解すべき史料には、絵画史料、地図、年表、写真、文書など多様な資料を用いているが、すべては探究すべきテーマに直結していることである。

②史料の読解と特定の過程で議論を活用したことである。特に、数人のグループで同じ史料の読解をめぐる議論させることで、関心と知識の共有化を図る方法を用いた。

③ワークシートの活用により、史料の読解結果を論述させたことである。

(6) 読解力を評価する歴史テストの構成

標記の課題に迫るために、米国の SAT II と英国の GCSE の歴史テストに着目した。

まず、SAT II の歴史テストのうち、思考力を問う問題は、①歴史上の重要な意思決定をめぐる対立・論争を取り上げることで、歴史的思考と知識・理解を総合的に問うもの、②歴史的対立・論争を現代人(生徒)の会話形式で出題し、歴史上の人物の発言にとらわれることなく、生徒の能力や状況に応じて多様な議論の展開を工夫するもの、③複数の言明を提示して、その論理性や証拠の適否を判断させるもの、からなっていた。SAT II のような客観テストでも、出題の工夫により歴史的思考を問うことはできることが示唆された。

次に、GCSE の歴史テストの場合は、二つのコースワーク(学校課題)を除き、事象の発展に関する問題、深く追求する問題、いずれも基本的に史料の読解と論述からなっている。そして次の4つの評価目標が掲げられる。①知識の発達、②史料の活用、③過去の解釈と表現、④記述による伝達の正確さである。それゆえ、KS3 を中心とする歴史の授業においても、これらの評価目標を想定し、史料の読解と論述を意識した授業展開が目指されることになる。まさしく指導と評価の一体化が実現しているのが英国の歴史教育といえよう。

(7) 結論

3年間の研究成果を簡潔に表現するのは難しいが、読解力を育む中等歴史カリキュラムと評価の基本モデルは次のようになる。

①歴史の年間カリキュラムは学習指導要領に即して年代史的に編成するとしても、各単元レベルでは通史にこだわることなく主題を絞って探究的に学習を組織すること。

②単元の探究に不可欠な資料として、できる限り一次史料(絵画史料、写真、現代語訳した文書史料を含む)を活用し、生徒に一定程度の時間をかけて読解させる機会を保障すること。

③史料の読解に先だって、まず類似の史料を事例にして教師が読解の方法に関する模範を示すこと。その際には、教師が頭で考えたことを口頭で説明しながら(think aloud)読解すること。

④生徒が史料の読解をする際には、史料の難易度に応じて単独、2人のペア、3~5人のグループ等で活動させ、教師はそれぞれの読解を支援する発問や助言を行うこと。

⑤生徒の史料読解の結果は、ノートやワークシート等に記述させること。記述に際しては、一定のルールを定めて証拠に基づく論述を心がけさせること。

⑥評価については、ワークシートやノートをポートフォリオ的に集めて評価の材料にするとともに、単元毎にペーパーテストを実施して、学習内容に即した史料読解を中心に主題の解釈・理解を論述させること。

こうした指導と評価の一体化こそが生徒の歴史読解力を育むことになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①關浩和, 原田智仁, 他6名, 社会科固有の「読解力」形成のための授業構成と実践分析(Ⅱ)ーフローマップ活用の視点からー, 学校教育学研究(兵庫教育大学学校教育研究センター) Vol.23, 2011, pp.71-79

②原田智仁, 史料読解に基づく歴史学習の指導法と課題ー高校日本史B「政党内閣の成立」の授業分析を手がかりにー, 社会系教科教育学研究(社会系教科教育学会), 査読有, Vol.22, 2010, pp.1-10

③關浩和, 原田智仁, 他6名, 社会科固有の「読解力」形成のための授業構成と実践分析(Ⅰ)ー関係性を重視したマップ活用の視点からー, 学校教育学研究(兵庫教育大学学校教育研究センター) Vol.22, 2010, pp.63-75

④原田智仁, 中等歴史教育における解釈学習の可能性ーマカレヴィ、パナムの歴史学習論を手がかりにー, 社会科研究(全国社会科教育学会), 査読有, Vol.70, 2009, pp.1-10

⑤原田智仁, 提案・活用型学習を保障する「学習材」開発, 社会科教育(明治図書) No.598, 2009, pp.14-19

⑥原田智仁, 変革の時代の歴史教育実践の創造, 社会系教科教育学研究(社会系教科教育学会), Vol.20, 2008, pp.239-248

〔学会発表〕(計1件)

①原田智仁, 高等学校において PISA 型学力観「キーコンピテンシー」をどのようにとらえ発展させていけばよいか, 全国社会科

教育学会第 59 回研究大会, 2010, 同志社
大学

[図書] (計 3 件)

- ①原田智仁編著, 明治図書, 高等学校新学習
指導要領の展開 地理歴史科編, 2010, 担
当頁 2-16, 202-205
- ②原田智仁編著, 保育出版社, 社会科教育の
フロンティア, 2010, 担当頁 11-14,38,65,
99,150,184
- ③原田智仁著, 明治図書, “世界を舞台” に
歴史授業をつくるー嫌われても世界史は
やめないー, 2008, 総頁 167

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田 智仁 (HARADA TOMOHITO)
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号: 90228651

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号: